

**Coterie Mix 02**

**2009**

## コウタリ・リアル 02

店長4こま。 .....	3
ひのこ	
ままならず .....	16
さきさかゆきじ	
いいこと .....	24
秋野劫	
ブラック・ブレックファースト .....	32
小宮山蘭子	

店長就任しました。



この漫画は  
作者の近所の  
着物屋の店長が

あまりにも  
ステキカワイイ  
がために

漫画にして  
しまった  
4コマです。

※実在の人物を  
元にしてますが、  
実在の人物とは  
そこまで  
関係ありません。





小宮山蘭子

「食べてごらん。おいしいよ」と、俺の頭を撫でた。

意を決して、ナイフとフォークを手にとり、黒い塊の端を少しだけ切り分けて、おそるおそる口に運んだ。

舌が麻痺したように鈍感で、味はまったくわからなかった。

おかしな夢を見た。

俺は、田園の広がる静かな田舎町にいた。町のはずれにある小さな白い家。その庭で、白樺のテーブルセットに腰掛け、朝食を取っていた。

庭から見える遠い山の上に洋風の古城があり、俺は頭の中で、それが「エジンバラ城」だと、認識していた。

そこでは、俺は五歳くらいの少年で、朝食を運んできた綺麗な女から「モーリス」と、呼ばれていた。

皿の上に、黒く丸い塊が乗っている。脇にあるサラダヤスクランプルエッグに比べると、それだけがまるで失敗作のように浮いていて、違和感がある。

「ママ」

と、言葉が突いて出た。その黒いものを指差し、

「これ、どうしても食べなきゃだめ？」

女は、父親と思しき白人の男と顔を見合わせ苦笑した。男が、

普段、減多に朝食をとることはない。

大抵は前夜の酒が残っていて、起きぬけから胃が重い。また、ヘビースモーカーの俺は、常に煙が居座っているようなモヤモヤした感じに苛まれていて、目が覚めたときなんてそれはほとんど最悪。朝食をほおぼるなんて気には、到底なれない。

とりあえずキッチンに行き、コーヒーを入れて、煙草に火をつける。

今日は日曜だった。

太陽はもう空高くのぼっていた。こんなに遅い時間まで起きられなかったのは久しぶりだった。すべてをふっ切り、腹を決めたから、気が楽になったんだろう。おかしくなるほど、気持ちがいい目覚めだった。

今日ばかりは朝飯でも食べそうなほど気分がよかったが、冷蔵庫は空だった。

部屋に戻り、電源を落としていた携帯をオンにすると、メール

が五件も入っていた。四件は上司の棚田から、一件は別れたばかりの元カノ・亜矢からだった。

どれも無視することにした。

朝飯やメールは、明日も生きている人間に必要なものだ。今日ですべてが終わる俺にはもう、関係ない。

俺は、今日、この世とおさらばするのだから。

それにしても、最後の朝に見た夢が、どうしてあんな夢だったんだろう。あの黒い塊は、何を意味していたんだろう？

どこかで見たことがある気がした。

それは、皿に乗っていた奇妙な食べ物だけではない。あの小さな家も、両親の顔も、朝霧の中の感覚も、エジンバラ城も。どこか憂鬱で重い気持ちと郷愁にも似た柔らかな感情が入り交ざった。

デ・ジャヴ？ いや、あの感じとも少し違う。

まさか、俺の前世？ 俺は昔「モーリス」という名の金髪少年だったのか。

「ばかばかしい」

思わず口にしていた。

気持ち切り替え、家から五分も歩けばたどり着ける量販店に行き、ロープを買うことにした。

日曜日の量販店は、広告のバーゲン品を求める家族連れでこっ

たがえしていた。

太くて頑丈なロープを、と黙っていたが、とても吟味できる状態ではなかった。ロープが置いてある工具コーナーで、「日曜大工実演」のイベントをやっていて、人だかりができていたのだ。

その群れの中をもみくちゃになりながら進む気にはなれなかった。

首吊りはあきらめた。

仕方ないので、遺書を書く便箋を選ぼうと、文具売り場に足を向けた。だが、売り場の狭い通路には小学生の女の子の群れがあつて、再び俺の行く手は阻まれた。少女たちはカラフルなメモ帳やレターセットを手に、鳥のようにさざめきあっていた。

「まあ、いいや」

俺は踵を返した。遺書は残さなまま逝くことにした。もともと、書きたいことなど何もなかったから、便箋売り場にたどりつけないのは、書かなくていいとの「おぼしめし」のようなものに違いない。

何も手にしないまま量販店を出たとき、腹がぐうっと鳴った。

量販店と同じ敷地内にある、ファミレスに入った。

武士は切腹の直前には食事をしないという話を聞いたことがあった。腹を切ったとき中のものが飛び出して、見苦しいことになるのを嫌ったらしい。

だが、さすがに切腹を執行する気はなかったし、どんな死に方